

型技術

金型の総合技術誌

Die and Mould Technology
2009 Vol.24 No.1

1

特集

高度技術で未来を拓く
日本発の
型技術2009

特別座談会

放電加工の
威力と魅力を語る

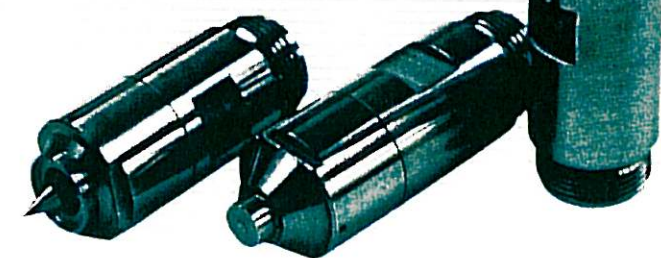


Hot Runner System
—ホットランナ成形装置—

プラグートノズル

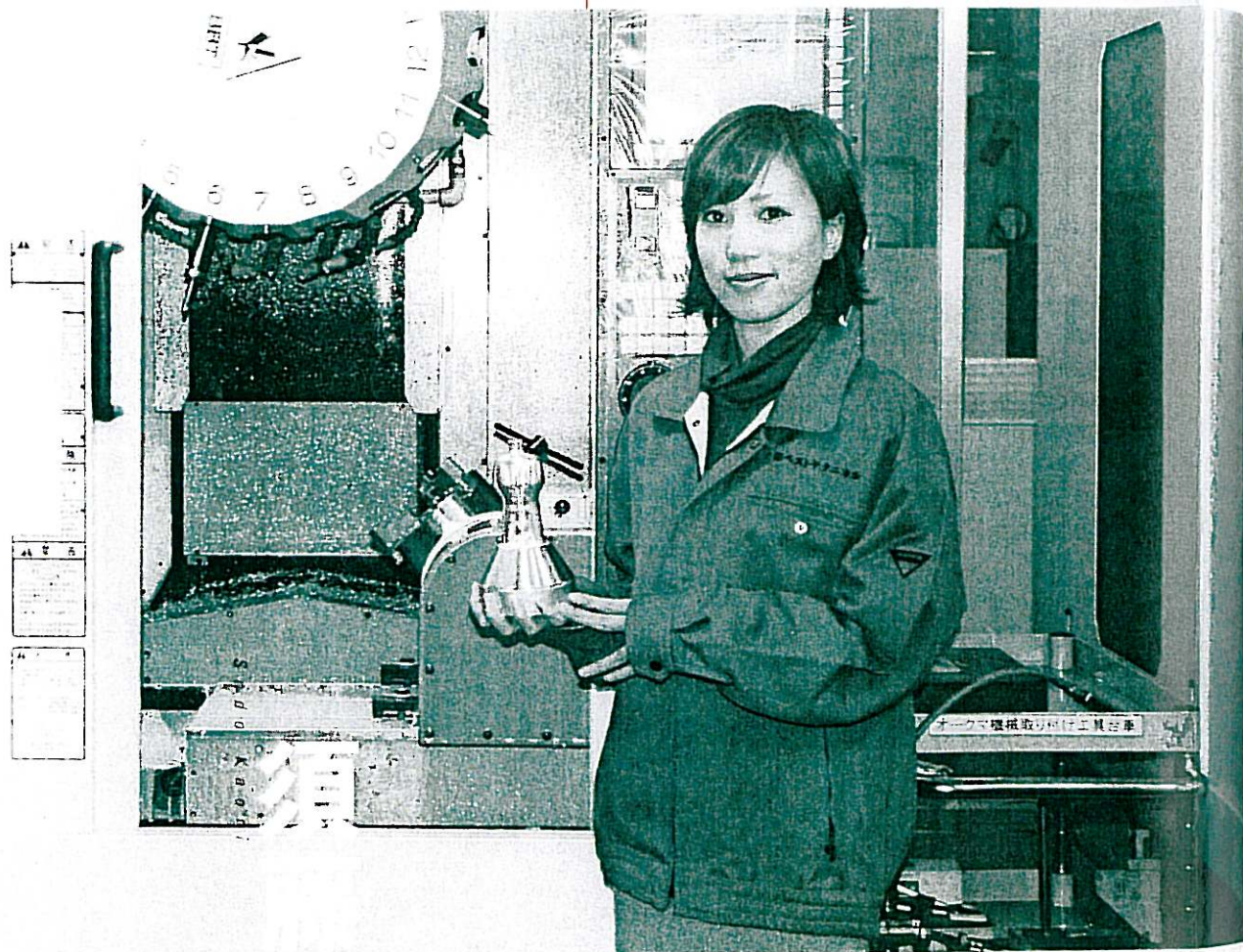
NH Series

NH2 / NH4



FISA ★ **ファイサ株式会社**
Future Innovations Striding Ahead

連載 **金型**の未来を
拓く
技術者たち
10



香織

1983年2月16日生まれ。
07年入社。趣味は音楽鑑賞など。

「父親の
力になりたい」「心が
会社を助け、
諦めない勇氣」が
自分を助ける

プラスチック成形金型の設計・製作・製品成形
ベストテクニカル

取引先を驚かせる「超短納期」成形

同社では小ロットの試作品を品質よくいかに早く納入するかを念頭に、CAD/CAMや工具、加工機などあらゆるツールの性能をフル活用してリードタイムの短縮を図っている。そして、それらの取組みがノウハウとなり他社には真似できない「超短納期」を実現している。

「当社は、他社が2週間かかる仕事を1週間で、1週間かかる仕事を3日で行えます」

そんな浪岡氏の言葉に最初は半信半疑の取引先も多い。しかし、実際に3日で浪岡氏が成形品を持っていくと「信じられない。一体どうやってつくったのだ」という驚きとともにそれが強烈な印象として頭に焼き付き「すぐに試作品が欲しい時や納期が迫りどうしようもなくなった時はベストテクニカルに発注する」という流れが取引先にできあがるようになる。「当社を信頼して仕事を出してくれる取引先との約束は絶対に守ります」（浪岡氏）という信念のもと、夕方にデータをもらい翌朝に納品した例もあった。

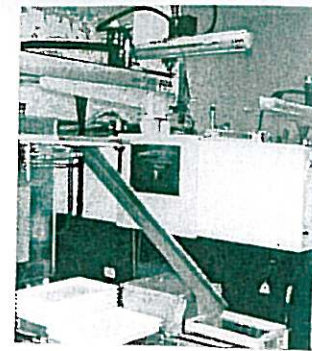
「諦めない勇氣」が自分自身を成長させる

さて、このようなノウハウを持ち、取引先からの信頼が厚い同社でも一時期業績が悪化し、全社員のおよそ1/3である7人が会社を去ったことがあった。当然、残った社員だけでなく浪岡氏も1人で何役もこなさなければ

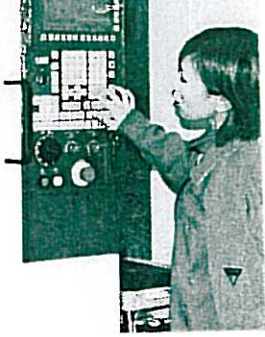
ベストテクニカルは1995年に創業した栃木県足利市にあるプラスチック金型メーカーで、金型の設計・製造からプラスチック成形までを一貫して手がけている。型分割によるアルミ金型の製作など、金型づくりからプラスチック成形に至るまで同社独自のさまざまなノウハウを持ち、特に多品種少量生産、短納期が求められる試作品の加工に強みを持つ。

そのほかにも切削によるシボ加工などの技術も持ち、取引先は自動車やデジタル機器、医療機器、玩具など多岐にわたる。

今回、浪岡健代表取締役と同社で設計業務に携わる息女の須藤香織氏に話を聞いた。



有限会社ベストテクニカル
所在地 栃木県足利市駒場町4-1
電話番号 0264-90-1027
代表取締役 浪岡 健
会社設立 1995年
従業員数 13人
事業内容 プラスチック成形金型の設計・製作および製品成形



ばならず、仕事が深夜に及んだり徹夜したりすることも多かった。

そのような浪岡氏が日々苦闘し、疲労する姿を見て、「会社のためにも父親のためにも自分が何か手助けができれば」と思い、06年12月に同社に入社したのが専業主婦をしていた娘の須藤香織氏である。浪岡社長はこのような娘の心遣いを「これまで最も感動したことの一つ」と振り返る。

入社後、須藤氏は事務仕事を手伝うことから始めた。これまでパソコンを触った経験すらなかったが、事務仕事を1人でもこなせるまでに成長した。そこで浪岡氏はさらに専門的な仕事をさせようと、08年2月、当時人員が手薄であったCAD/CAMによる金型設計を須藤氏にさせた。

須藤氏はCAD/CAMベンダーのスタッフから、金型の専門用語に始まりCAD/CAMの操作、設計の進め方に至るまで、つきっきりで教育を受けた。そしていよいよ設計業務を担当することになったのだが、実際に現場で設計を始めるとなかなかうまくいかなかった。ベンダーのスタッフが流暢に操作し、機能を使いこなしていたCAD/CAMであったが、実際に設計しようとしてもどのように使って応用すればいいのかわからなかった。



須藤氏はそのような自分に対する不甲斐なさやベンダーのスタッフができて自分にはできない悔しさを噛み締めるながら仕事をしてきたが、「現場の状況を考えて自分が一刻も早く戦力にならざるを得ない」という責任感から、途中で挫けて仕事を投げ出したというような考えは一切浮かばなかった。

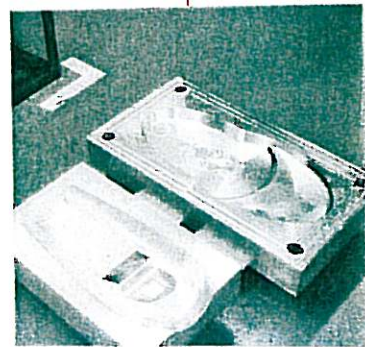
現場で須藤氏が悔し涙を流しながらも仕事に取り組む姿を度々目にしていた浪岡氏であったが、あえて手助けをしないことが多かった。

「本当は1年ごとにじっくりとステップアップさせたいのですが、当社にはそのような余裕がありません。『諦めない勇気』を持って突き当たった壁を自分の力で越えていってほしかったのです」(浪岡氏)

実の娘であるからこそなおさらのように厳しく接した。また同社の売りである「超短納期」の製作方法を自分自身で早く学びとって欲しかった。

将来は右腕として期待

須藤氏は自宅に帰れば5歳の息子の育児や家事をしなければいけないため、毎日遅くまで会社に残って



仕事だけに打ち込める環境ではない。そこで、「いかにうまく時間をつくり効率よく仕事をできるかを考えました」(須藤氏)というように、夫の協力のもと、育児や家事の合間を縫って自宅に帰ってからもPCで設計の仕事が続けた。

このような努力の結果、現在では設計者として同社の貴重な戦力となっている。

「娘には金型に関する知識がゼロの状態から、当社のスタイルを叩き込んだので、短納期でいかに早くつくるかという改善意欲を常に持って仕事に取り組んでくれています」(浪岡氏)

同社に入社する社員の中には、前職で経験した金型製作方法との違いに戸惑い、超短納期のスタイルになかなかついてこれなかった社員もいたというが、須藤氏にはすでに常識として身に付いているようだ。

また最近では、須藤氏は仕事の幅を広げ、マシニング加工も担当している。今後は同社が08年11月に導入した5軸加工機による加工ノウハウを身に付け、業務に活かしていくことが目標だ。

「金型に関わる仕事は自分に向いていると気づきました。今後も仕事を続け、会社と父親の力になりたいです」と語る須藤氏。一方の浪岡氏は「将来はさまざまな経験をさせたうえで、経営に関わる仕事も任せていきたい」と語る。敏腕を振るう娘の姿を想像し大きな期待を寄せているようだ。

